

年間第24主日

第一朗読 出エジプト 32・7-11、13-14

第二朗読 一テモテ 1・12-17

福音朗読 ルカ 15・1-10

2022.9.11

カトリック高円寺教会  
主任司祭 高木健次神父

今日の第一朗読は「出エジプト記」で、エジプトで奴隷だった人々が神様の助けによってエジプトから脱出して、そのあとシナイ山で神様によって掟を、自分たちの社会がどのように生きて行ったらいいのかという掟を神様に示されて、神の民となるという、その直後のお話しです。契約を結んだ。そして神様が民に何を望んでいるかを示された。それを受け入れたにもかかわらず、モーセがちょっと目を離しているうちに黄金の子牛を拝んだりなんかしてその掟から離れている。その状態を神様が怒っちゃって、「もう滅ぼす」と。でも、実際に神様はこういう方なんですと言おうとしている物語ではなくて、わたしたちは正しく歩んでないけども、でも神様が憐れみのうちに共にいてくださるということをストーリーの中で言おうとしている物語です。

その中で、モーセになだめられて、下す災いを下さないことにされました、というお話で今日の第一朗読は終わっていますが、このあとまだ続きがあって、「よし分かった。災いを下さないし、そしてイスラエルの民も約束した通り約束の地に入れるようにしてあげます。だけど、あなたたちと一緒にいたら自分はいつも怒っちゃうから、自分と一緒に行かない。あなたたちと行かない。その代わり約束の地にどうぞご自由に入ってください」みたいなことを神様がおっしゃるわけですが、それが、「そうじゃなくて、どうぞ一緒に行ってください」と言って、神様が民と共に一緒に旅を続けてくださることになりました、というようなのが続いていくんです。

この物語がひとつ表しているのは、いろんな生活のことが満たされていても、でも本当に関心を向けて怒ったり、あるいは一緒に喜んだり、共に歩んでくれる、それがなければわたしたちの心は満たされないんだ。これは、もちろん根本的には神様が、なんですけど、お互い同士もそうなんですよね。例えば、生活全部整えて、でも家庭の中にお互いに関心を向け合うという愛情がなければ、お互いのために怒ったりとか喜んだりとか、そういう共に歩むっていうことがなければ、いろんな整えられたものそのものが息苦しいというか、あるいは一人ひとりを苦しめるようなものになりかね

ないということをひとつ表わしているんじゃないかな、この出エジプト記のこの場面の結末は。そんなふうに思うんです。

わたしは今カトリック東京国際センターという東京教区の外国人支援の部署の担当でもあります。そこでいろんな、生活に困窮する外国の方の食料を中心とした支援活動を行っています。主に対応してくれているのは一人のシスターなんですけども、そのシスターは本当に来る人来る人のことを全部把握してて、そしてその生活の状況をいろいろ聞きながら、ただ「はい、これです」って言ってただ渡すだけじゃないんですよ、まずそれぞれの状況を聞いて、そして基本のセット以外に、赤ちゃんが生まれた人だったらこういう物が必要なんじゃないかとか考えながら、ある物で——わたしたちの活動は寄付で賄っていますから、その時にご寄付いただいてある物の中から準備したり、あるいはこういう物呼び掛けましょうかと相談してくれたりとかね。シスターが一人ひとりのお話をよく聞いてくださっているのです、むしろそのシスターと話したくて来るほうが目的になるっていう、特に男性は孤独になっちゃうから、そういう人が多いんですよ。だから、大体来てる人は在留資格がなくて仕事に就けないとか、だから収入がないので支援に頼らざるを得ない、そういう人ですけども、あとで在留資格が与えられて仕事をできるようになって、「もう来月あたりから支援はいただかなくても大丈夫になりました。だけど時々シスターに話しに来ていいですか」って、そういうような人が結構いるんです。だから、やっぱり自分に本当に関心に向けてくれるって人の存在を本当に欲している。いろんな食べ物があって、仕事があって、だけじゃないんだ、ということなんじゃないかなということをよく痛感させられるんです。

今日の福音は、それこそイエス様が神様っていうのはいなくなった羊を探す羊飼いのように、あるいは財産の一部がなくなっちゃって一所懸命探す人のように、一人ひとりを探してくださるんだというお話をたとえ話で語ってくださってるわけですけども、それは裏を返せば、わたしたちの心の中に「わたしがいなくなったら探してくれますか？」っていう心の叫びが、社会に対する心の叫びがあるし、大体それに社会から返ってくる答えっていうのは、「あなたが役割を果たすならば探しましょう」だったり、あるいは「探しませんよ。あなたの代わりはいくらでもいるんだから」だったりとか、「あなたがいなくなってくれば、その分こっちが余裕が出るので、どうぞいなくなってください」だったりね。「わたしがいなくなったら探してくれますか？」っていう魂の問いに対して人間の社会から返ってくる答えっていうのはそういうようなものです。実際にその言葉通りにお互いに言い合っているわけじゃないけど、でもその雰囲気の中で、多かれ少なかれみんな傷ついている。でも、神様はそれを望

んでないよ、ということ。それが神様っていうのは一匹の羊でも探してくださるんですよっていう神のみこころをあらわしているんだし、「神様ってそうなんだ。へえ～」じゃなくて、わたしたちも神の子ならば同じようにお互いに関心を向け合う、そこに神の国、わたしたちが本当に生きられる関係があるんじゃないかなっていう問いかけでもあるように思います。

お互い同士が全く探し合わない、関心を向け合わない、むしろ、いなくなってくれば、その分こっちが潤うんだみたいに思い合っているという状態は地獄って言います。その反対側が神の国。わたしたちはいつも主の祈りで、「みこころが天に行われるとおりに地にも行われますように」。この人間社会というのはその中間で、完全に地獄でもないけども、でも完全にお互い同士が関心を向け合ってそして安心できる、その中間の中でどっちにでも転ぶ要素を持っています。でも、わたしたちが、神様がしてくださるように、あるいはしようと望んでいらっしゃるように、お互い同士が本来は関心を向け合う。そして、自分も探してもらえるんだって安心感の上に、他の人に対して、「わたしがなくなったら探してくれますか？」っていう心の叫びに、いろんな条件なしで「もちろん探しますよ」と言い合える繋がりになってくるんじゃないかなと思うんです。

わたしたちは、一人ひとりが、生きて行くこととか、日々のいろんなことに追われてほんとに必死、必死であるからこそ他者に無関心になりがちですけど、でも、この典礼を通して、御聖体を通して、また日々の祈りを通して、神様のみこころに本当に触れて、それをわたしたちの心にもしていきたいなあ、と思います。そうであるならば、本当の意味で、まず身近なところから、共に生きていくっていう状態が実現していくと信じます。

今日わたしたちに父である神様のみこころを示してくださったイエス様ご自身が一人ひとりの中に共にいて、そして、少しでも、同じようにお互い傷ついた者同士を探すというか、関心を向け合う、そのような者になれるように、わたしたちも神様のみこころに心を開いて、このごミサを共に捧げたいと思います。

---

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも載っています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>